

自己評価維持モデルにおける反映過程の再検討

安藤直樹

人はポジティブな自己評価を維持したいと動機づけられている。これが、Tesser (1988) によって提唱された自己評価維持モデル (Self-evaluation maintenance model) の基本的仮定である。自己評価維持モデルでは、自他との関係において、自己評価の高揚と低下を導く2つの相反する過程があるとされる。1つは反映過程 (reflection process) と呼ばれ、心理的に近い他者の優れた遂行によって自己評価が高められる過程である。もう1つは比較過程 (comparison process) と呼ばれ、心理的に近い他者の優れた遂行によって自己評価が低められる過程である。どちらの過程も心理的に近い他者の優れた遂行によるものであるが、2つの過程のいずれが生起するかは、他者の遂行が個人の自己定義 (self-definition) にどれだけ関わっているかによる。この関わりの程度を示すのが、関与度 (relevance) である。他者の遂行が自己定義にとって重要なものであれば、関与度は高く、比較過程が相対的に重要となる。また自己定義にとって重要でないものであれば、関与度は低く、反映過程が相対的に重要となる。モデルでは、人はポジティブな自己評価を維持できるように、他者との心理的近さ、他者および自己の遂行、あるいは遂行に対する関与度を、認知的、行動的に変化させようと試みるであろうと予測する。本研究では、自己評価維持モデルの妥当性について2つの側面から検討し、主として反映過程について考察を行った。

研究1

研究1では、認知的側面から、モデルの妥当性を検討した。モデルの適用可能性を検討するために、自己定義にとって重要な次元として、自身の性別にとって重要な特性を取り上げ、それらの特性において自己や他者の遂行をどのように認知しているのかを調べた。また、自己に対する認知に影響を及ぼすと考えられる個人差変数として自尊心を取り上げ、モデルとの関連を調べた。モデルから、自己定義にとって重要な、関与度が高い特性においては、心理的に近い他者よりも自己のほうが、あるいは少なくとも同じくらいそれらの特性を備えていると認知し、反対に関与度の低い特性においては、自己よりも心理的に近い他者のほうがそれらの特性を備えていると認知することが予測された。

方法 大学生122名を対象に、質問紙法によって一斉に実施した。このうち分析の対象となったのは、女子学生109名である。質問紙の構成は以下の通り。①伊藤 (1978) の性役割に関する特性を表す30項目について、各項目で表されるような女性になることがどのくらい重要であるか、また自分自身、友人 (心理的に近い他者)、日頃付き合いのない人 (心理的に遠い他者) が各項目にそれぞれどのくらいあてはまるかを6段階で評定。②ローゼンバーグの自尊心尺度 (4段階評定) ③女性であることの重要性和満足度を6段階で評定。

結果と考察 女性であることが重要であると評定した81名のうち、自尊心尺度における上位約25%を自尊心高群 (23名)、下位約25%を自尊心低群 (21名) とした。また各項目で表される女性になることの重要性の評定において、被験者が重要であると評定した項目に関与度の高い特性、重要でないと評定した項目に関与度の低い特性とし、それらの特性が自分自身、友人、日頃付き合いのない人のそれぞれにあてはまる程度について、評定対象×関与度×自尊心の3要因分散分析を行った。なお分析は、自己と心理的に近い他者、心理的に近い他者と遠い他者の2つのサブセットに分けて行った。

その結果、自尊心高群の被験者は、関与度が高い特性で、自己と心理的に近い他者が同じくらいその特性を備えており、関与度が低い特性では、自己よりも心理的に近い他者のほうがその特性を備えていると認知していることが示され、モデルからの予測を支持しているように思われた。しかし、モデルの予測を支持しなかった自尊心低群と比べると、心理的に近い他者に対する認知には両群に大差はないが、自己に対する認知に大きな違いが見られた。自尊心高群は低群よりも自己に対する認知はポジティブであり、かつ関与度が高い特性を低い特性よりもポジティブに認知する傾向が強かった。このことから、自尊心高群で見られたモデルを支持するような結果は、モデルが仮定するような自己評価を維持したいという動機に基づいたものであるというよりも、自尊心の程度によって自己に対する認知が異なっていたことによるものであると解釈された。また、自己に対する認知において、関与度が低い次元よりも高い次元を極端にポジティブに認知するこのような傾向は、モデルを認知的側面から検討したこれまでの研究 (e.g. 磯崎・高橋, 1988 ;

桜井, 1992 ; Tesser et al., 1984) においても見られており, こうした自己に対する認知の性質が, 結果としてモデルを支持するような交互作用をもたらしている可能性が指摘された。さらに, こうした自己に対する認知の性質は, 反映過程の妥当性において特に重要な問題である。自己に対する認知が関与度が低い次元よりも高い次元で極端にポジティブである傾向, 逆に言えば, 関与度の低い次元の認知が高い次元に比べて極端にネガティブであることによって, 自己と心理的に近い他者との相対的な差がもたらされている可能性が考えられた。つまり, 関与度が低い次元において, 心理的に近い他者をポジティブに認知しているというよりも, 自己をネガティブに認知していることが, 結果として反映過程の生起を示しているのではないかといった問題が提起された。

研究 2

研究 2 では, 自己評価の高揚をもたらすとされる反映過程に直接焦点を当て, 自己評価に付随すると考えられる感情を調べることによって, 反映過程の生起の検証を試みた。また統制条件を設けることによって, これまでの研究では検討されていない, 反映過程による自己評価の高揚 (ポジティブな感情の生起) の実質的な効果を調べた。さらに, 反映過程に及ぼす心理的に遠い他者の影響を, 3つの実験条件を用いて検討した。

方法 被験者は大学 1 年生 74 名。被験者は同性の友人 (心理的に近い他者) と一緒に, 「臨床心理士に必要なとされる特殊な感性を測定するテストの妥当性を調べる実験」という偽りの目的の実験に参加した。最初に, 臨床心理士に対する関与度を調べるために, ①将来臨床心理士になることがどのくらい重要であるか, ②臨床心理士についてどのくらい知っているか, ③臨床心理学関係の本をどのくらい読むか, をそれぞれ 6 段階で評定させた。そして特殊な感性を測定する架空のテストとして, 被験者は写真を見てその人物が精神分裂病者かどうかを判断する課題を行った。課題終了後, 全ての被験者は 6 問中 1 問正解であったとフィードバックされた。さらに最優秀成績条件では, これまでの最高得点者 (心理的に遠い他者) の成績は 6 問中 3 問正解であり, 友人の成績は 6 問中 4 問正解であったと伝えられた。また優秀成績条件では, これまでの最高成績は 6 問中 5 問正解であり, 友人の成績は 6 問中 4 問正解であったと伝えられた。しかし付加的情報なし条件では, 単に友人の成績は 6 問中 4 問

正解であったと伝えられた。統制条件では, 最高成績ならびに友人の成績の情報は一切与えられなかった。次に被験者は, 実験者が別に行っている共同研究に協力するという形で, 小柳ら (1959) による熟知度の低い 3 音節の名詞 20 個 (アリニなど) を「快い-不快な」の S D 尺度上で 7 段階評定した。この評定は, 感情の間接的な測度として用いられた。さらに, 自己報告による感情の測度として, 7 つの形容詞対 (うれしい-悲しいなど) からなる S D 尺度を 7 段階で評定した。

結果と考察 臨床心理士になることが重要でないと回答した 60 名を分析の対象とした。3 つの実験条件の間には, 心理的に遠い他者の成績情報に関する操作の有効性が認められなかったが, 心理的に近い他者が自己よりも優れていることを知らされた実験条件では, 他者の成績についての情報は何も与えられない統制条件と比べて, ネガティブな感情を経験した被験者の割合が高かったことが示された。この結果は, 予測とは反対に, 比較過程の生起を示しており, 反映過程の生起する条件に対して疑問が投げかけられた。今回の結果は, 被験者にとって関与度が低い課題においても, 比較過程が生起することを示しており, このことから, 関与度は比較過程と反映過程のいずれが生起するのかを規定しているというよりも, 単に比較過程による自己評価の低下の程度を示しているにすぎないのではないかと考えられた。しかし, この考えは反映過程の存在を否定するものではない。BIRGing (Cialdini et al., 1976) の研究が示しているように, 心理的に近い他者の優れた遂行によって自己評価の高揚をもたらされる現象は確かに存在すると考えのは妥当であり, したがって反映過程はモデルが仮定しているほど単純なものではなく, その生起にはモデルでは仮定されていない他の要因が関わっていることが考えられた。

今後の課題

本研究の結果から, 自己評価維持モデルが仮定する反映過程の生起の条件に疑念が持たれた。今後は, 反映過程における自己評価の高揚のメカニズムを明らかにすることが必要であるとされ, 反映過程において何が起きているのか, また反映過程における自己評価の高揚は何によってもたらされるのかを検討することが重要な課題であると考えられた。